

低温貯蔵種子

ご利用にあたっての 注意点

「低温貯蔵種子」は、「災害備蓄用」及び「需給調整用」として適切な温度と湿度管理のもとに1年間低温貯蔵したもので、出庫前に発芽率が「90%以上」であることを確認しています。

ご利用にあたっては、保証票に記載の「種子使用上の注意事項」に加えて、次の「低温貯蔵種子利用のポイント」についてもご注意ください。

低温貯蔵種子利用のポイント



ポイント1 浸種時の水温は、必ず10℃～15℃を保持

低温貯蔵種子は、浸種時の低水温により、発芽に影響を受ける可能性があります。浸種時の水温は、必ず10℃～15℃を保持しましょう！

【例】水温10℃、10日、積算温度100℃(水温15℃、7日、積算温度100℃)



ポイント2 催芽・出芽時は適温(30℃)を超えないこと

低温貯蔵種子は、育苗時の高温に弱い傾向があります。催芽や出芽の際は、適温(30℃)を超えないよう注意してください。

千葉県・千葉米改良協会・全農ちば・千葉県米集連

令和6年12月作成

低温貯蔵種子利用時の営農指導のポイント

低温貯蔵種子チラシに記載の注意事項の見直しを行いました。改めて、低温貯蔵種子利用時の育苗期の営農指導のポイントを解説します。



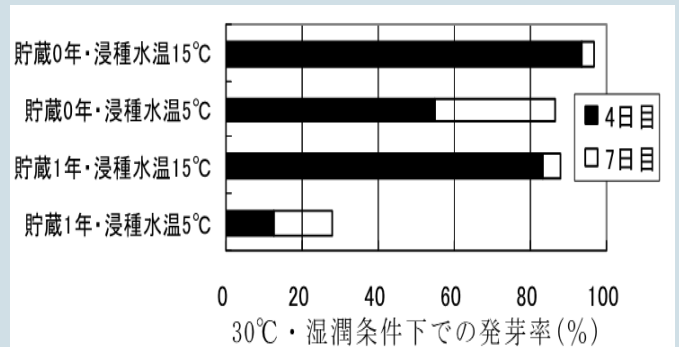
- 低温貯蔵種子は、当年産種子と種子消毒・浸種・催芽スケジュール※は変わりません
- 低温貯蔵種子は、当年産種子と比較して、温度管理に注意が必要となりますので、次のポイントに注意して営農指導をしてください

注意ポイント① 浸種水温

水温は、必ず10℃～15℃を保持するよう指導してください。

- 低温貯蔵種子は浸種時の低水温(5℃)による発芽率の低下が、当年産種子より大きい傾向がある
- 低温期に浸種する場合は加温が必要

右図：種子の貯蔵年数・浸種水温と発芽率の関係
(水稻の採種栽培第4版、R5、千葉県他)



注意ポイント② 催芽・出芽温度

催芽・出芽時は適温(30℃)を超えないよう指導してください。

- 低温貯蔵種子は、当年産種子より育苗時の高温(40℃以上)に弱い傾向がある
- 低温貯蔵種子を利用する場合は、温度を正確にコントロールできる育苗器等を使うことが望ましい
- 無加温で出芽させる場合、催芽温度が高くなり、発芽率の低下が助長されるため注意が必要

- ※ 浸種は種子消毒後に実施する発芽を揃えるために10℃～15℃の水に浸漬させる処理で、積算水温で100℃程度(例:水温10℃で10日間、水温15℃で7日間)が適当
- ※ 催芽は出芽を揃えるため、浸種後の種粒を育苗器などで30℃に加温する処理
- ※ 化学農薬による種子消毒の浸漬処理時は、薬液の温度が低すぎると効果が低下するため温度を10℃以上に保つ
- ※ 低温貯蔵種子は浸種水温や催芽・出芽温度を適正温度にコントロールする必要があるため、配付の際は、浸種時の加温機器や育苗器の所有の有無を考慮すること

<参考> 従来の低温貯蔵種子チラシ

低 温 貯 蔵

種子もみの 使用にあたって

外装袋と保証票に「低温貯蔵種子」のシールが貼付された種子もみは、災害備蓄および次年度需給調整用として適切な温度と湿度管理のもとに一年間低温貯蔵をしたものです。

この種子もみは出庫前に発芽率の確認を実施しております。

使用にあたっては保証票の「種子使用上の注意事項」にもとづきますが、この種子もみの使用にあたっては、必ず水温を10～15℃にして、1～2日程度長めに浸漬して下さい。

(例：水温10℃、12日間、積算水温120℃)

シール見本

低温貯蔵種子

千葉県・千葉米改良協会・全農ちば・千葉県米集連